
 会員からの声

新刊書の紹介

「新・めん羊の繁殖技術」福井 豊 著

山本 裕介

北海道立畜産試験場

めん羊は、今から約8千年前、反すう動物としては最も早くに家畜化され、それ以来、人類の衣食住に大きく貢献してきた。現在では、世界中で3,000にも及ぶ品種が11億頭も飼育され、肉、毛、皮、乳、内蔵、骨、血液、糞尿などすべてが余すところ無く利用されており、われわれの生活に非常に身近な、また、無くてはならない家畜である。

わが国でめん羊が産業として飼養されるようになったのは、明治時代になってからである。明治の一時期と大正半ばに羊毛の国内生産を目的としてめん羊飼養が奨励され、多数のめん羊が輸入されたが、飼養管理および衛生管理の不備からいずれも失敗している。終戦後に衣料資源の不足によって急激にめん羊飼養熱が高まり、コリデールを中心として昭和32年には94万頭余りにまで増加したが、輸入羊毛の増加に伴う価格の下落などにより、昭和51年にはわずか1万頭余りに激減した。その後、水田再利用や休耕地の利用のためサフォークが輸入され、平成2年には3万頭余りにまで増加したが、現在(平成15年)は1万841頭(北海道は、5269頭)が飼養されているにすぎない。

現在、めん羊飼養は米作や畑作との複合経営が一般的であり、めん羊飼養を専業とすることはなかなか難しい。しかし、都会の人々にとって動物とのふれあいの場や安らぎの場の重要性が認識され、体験型のファームインやグリーン・ツーリズムが注目される中、

おとなしく親しみやすいめん羊は、これらの目的に最適である。また、河川敷や果樹園、夏のスキー場などで下草刈りに用いることも可能である。

15年前、めん羊が増加しつつある頃に「めん羊の繁殖技術」が出版され、わが国で唯一のめん羊に関する繁殖技術の専門書として利用されてきた。本書は、これに人工授精、胚の凍結保存、核移植など新しい技術について加筆されたものである。繁殖生理、交配と発情、人工授精、妊娠と分娩、胚移植などめん羊の繁殖技術が網羅されており、それらの項目が解り易く、また、すぐに利用できるように具体的に解説されており、大変読みやすい。

本書は生産者をはじめ畜産関係者、研究者、畜産・獣医学専攻の学生などには最適な教科書である。是非本書を手に取り、活用していただきたい。そして、本書がわが国のめん羊の増産に寄与し、地域の活性化に役立つことを期待する。

発行 2004年4月1日

頁数 128

価格 1,500円

発行所 東京農業大学出版会

〒156-0054 東京都世田谷区桜丘1-1-1

TEL: 03-5477-2562

FAX: 03-5477-2643